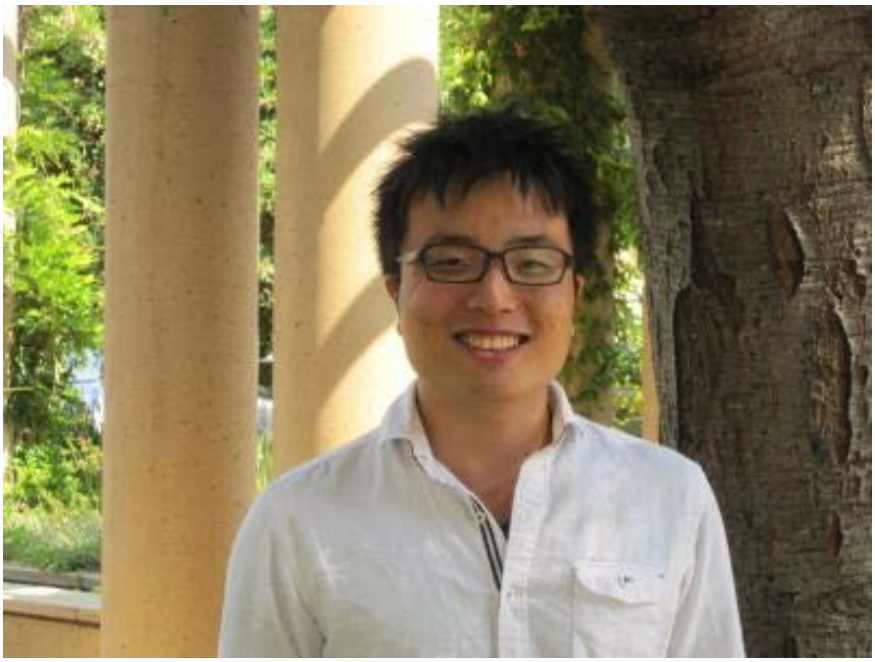
2014 年 11 月

留学生レポート

2014 年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生
Stanford University Department of Economics Ph.D. student
野田俊也



学部の事務の人に撮ってもらった、大学でのプロフィール写真。日本ではこういう髪型でいることが多かったのですが、アメリカで日本人的な髪型を維持するのはかなりハイコストになりそうです。

スタンフォード大学経済学部博士課程の 1 年目に所属している野田俊也です。今回は最初の留学生レポートとして、スタンフォード大学での学業・研究・生活等に関する近況報告をさせていただきます。

1. 学業

これは英米の経済学の大学院ほぼ全てに共通するカリキュラムだと思いますが、博士課程の新入生が 1 年目に取る授業は固定されており、ミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学の基礎を習得することが要求されます。(基礎とはいっても、全員が最終的に Ph.D.を取得することが前提とされている環境での『基礎』なので、例えば東京大学の大学院の必修科目と比べるとハイレベルです。)

1 年目の学生の基本的な目標は、「専門的な内容の学習、および自身の研究が始められる程度に『基礎』が身についている」ということを認定されるための試験である、Comprehensive Exam (学生たちは Comp という略称で呼んでいます)という試験を突破することにあります。

1年目のスケジュールはこれを基本として設計されており、具体的には以下のようになっています。

8月下旬 ～ 9月中旬	Math Camp （各教科の前提となる数学の補講プログラム）
9月上旬	Comprehensive Exam (免除試験、前年度の追試)
9月中旬 ～ 12月中旬	秋学期 および 期末試験
1月上旬 ～ 3月中旬	冬学期 および 期末試験
3月下旬 ～ 6月上旬	春学期 および 期末試験
6月中旬	Comprehensive Exam
9月上旬	Comprehensive Exam (追試)

Comp を突破しなければ専門的な内容へ進めない…（＝落第、もしくはもう1年やり直し！）という意味では、この最終試験は非常に恐ろしいものなのですが、厳しい Comp を課して、Ph.D. student たちを更に選抜する大学群（シカゴ大学やペンシルバニア大学等がこういう方針を採っていることで有名）とは異なり、スタンフォード大学は Comp での落第者をあまり出さないので、これに対するプレッシャーは比較的軽い方だと思います[1]。

前年度の Comp の追試が行われる 9 月上旬には新入生は既に渡米しており、新入生もこれを受験することができます。これを受けて一発でクリアすることができれば、その学生はクリアした科目に関して既に十分な能力があるものとみなされ、その科目の履修を免除されます。これを受験するのは、私のように他の大学院で修士課程を終え、入学前に既にある程度勉強している学生が多いようです[2]。スタンフォード以外では必修科目として教えられていないような内容も含まれるので、いきなり受けて突破するのはなかなか大変です。

今年は全体 20 名中 3 名の学生がミクロ経済学の Comp を受験し、うち私を含む 2 名がパスしました。というわけで、私は現在、他の学生がミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学の 3 科目を受講している中、マクロ経済学・計量経済学の 2 科目だけで良いことになっています。結果としてできる余った時間の使い方は、2~3 年目向けの専門的な科目を履修することが最も基本的ですが、今学期は自分の関心とぴったりな専門科目がスケジュールと合わないこともあって、自分自身の論文の執筆、英語の学習、セミナーへの出席などに充てることにしています。

---

[1] どちらの方針が良いかについては諸説ありますが、1.厳しい方針を採ると複数の大学に合格した学生からの人気が下がってしまうこと、2.厳しい方針によって同期での競争が激しくなると、学生の間で勉強会などが組織されづらくなること、3.メリットである「1年目の基礎をものすごくしっかりやるようになる」ことがさほど大きなアドバンテージと思えないこと（私のように、既に研究を始めている学生にとっては足枷にすらなる気がします） から、個人的にはスタンフォード的な方針の方が勝るのではないかと思っています。もちろん、データに基づいたフォーマルな分析ではありません。

[2] 他の大学で修士課程を取得している学生は1番の多数派で、全体 20 名中の約半数（そして非英語圏出身の留学生全員）がこれに該当します。残りの約 1/4 は 1 度どこかへ就職してから博士課程へ来た人たちであり、意外に思われるかもしれませんが、学部から直接入学してきた人は 1/4 程度しかいません。

2. 研究

すべきことの多い毎日なので、なかなか研究に充てる時間を十分に割けないことも多いのですが、日本にいたときから取り組んでいる研究を何とかジャーナルに載せなければならないので、これらの論文の改稿にも勤しんでいます。できれば年内のうちに今抱えている研究を全て仕上げてしまいたいと思っているのですが、どう転ぶかはまだ予測がつきません。

留学前と比べて自分のやりたい研究への時間が割けなくなってしまっている、というのはもどかしい状態なのですが、スタンフォードが自分のメインフィールドである制度設計論について世界最強の大学であるため、これに関するセミナーが週 1～2 回も開かれているのは非常に素晴らしいです。面白そうなトピックやアイディアをいくつも知ることができ、将来の研究の材料になりそうな予感がしています。

経済学は他の分野と比べると論文のパブリッシュが難しいと言われ、博士課程の間に 1 本も accept されないことも珍しくありません。（経済学の査読の厳しさと細かさは、例えば今野浩先生の『工学部ヒラノ教授』シリーズに少し批判的に書かれています。）したがって、留学生レポートの中で “Noda gratefully acknowledges financial support from Funai Foundation for Information Technology.” と書いた論文を披露できるかはまだわかりませんが、ともかく全力を尽くします。

3. 生活

もちろん生活は日本にいたときと比較して大きく変化しました。しかしスタンフォードは日本からの留学生にとって「ベリーイージー」な環境であると言われていて、事実その通り、暮らしは非常に快適です。夏涼しく、冬は暖かく、空気はカラッと乾燥していて、程よい日差しを 1 日中浴びることができるという最高の気候で、しかもキャンパス周辺を深夜に自転車で移動してもさほど不安のない、アメリカの中では抜群の治安の良さです。日本人も多く住んでいるためか、日本食のレストランや、そして日本風のスーパーマーケットもキャンパスから 5km ほどの位置にあり、ホームシックとは無縁の生活を送っています。

ただし、スタンフォード大学がある街であるパロアルトは、全米でも屈指の高級住宅地であり、出費がとにかくかさみます[3]。キャンパス内の院生向けの寮でも、1 人部屋なら月 1300 ドルから、ルームシェアでも自分の部屋が欲しければ月 900 ドルが下限という家賃相場で、キャンパス外は平均的にもう少し高めになるようです。食費も外食をすると高くつき、キャンパス内でも 1 食 8 ドルぐらいから、外で食べればチップ込みで 15 ドル～20 ドル。クオリティは悪くないけれど、日本で 1000 円出せばもっと良いものが食べられるだろうな、という印象で、たまに食べに行くには良いのですが、普段の生活では少し躊躇してしまいます。幸い、ス

[3] 土地自体は有り余っているので、なぜ地価が高いのか不思議だったのですが、政策的な影響で新しい家を建てることに関して規制がかかっていて、人口密度が低くても住宅地の供給が極めて限られているという状況にあるようです。経済学を学んでいる者の感覚からすれば非効率な印象を受けますが、規制を撤廃すれば地価が下がって現在の地主が損をし、かつ比較的所得の低い層が移り住んできて治安が悪くなるという理由から、なかなかそういう議論にならないのでしょう。

ーパーマーケットの値段の相場は東京とそう変わらず、料理は私の趣味の 1 つなので、日曜に肉・野菜を買い込んで保存食を作り、それを詰め合わせて弁当を作る習慣になってきました。

経済学は生活にも密接した社会科学ですので、アメリカでの暮らしの細々としたことから発見があることも多いです。例えばカリフォルニア米の価格や品質（味）は TPP に関連する農作物の関税撤廃の重要な議論の材料ですが、最初に買ってみた『田牧米ゴールド』という品種は、日本で買っていた米の値段と同じぐらいで、味はむしろこちらの方が良いぐらいです。逆に肉類は思ったほど安くないな…という印象があります。これについては、キャンパスから自転車圏内にあるスーパーマーケットが地価の影響を受けて割高となっていることが理由かもしれません。こうした小さな発見が新しい研究につながる可能性は低いかもしれませんが、せっかく異なる環境で生活する機会をいただいていることですし、何が論文の材料になるかはわからないので、とりあえず色々なことにアンテナを張っておこうと思います。

2014 年 11 月 7 日、Little Big Game と呼ばれる、カリフォルニア大学バークレー校の経済学部の学生とスポーツを楽しむ交流イベントで、同期の博士課程の学生たちと撮影。下段中央の 1 番顔が大きい学生が私です。

交友関係についてですが、スタンフォードの経済学部での人間関係は、競争的というよりも協力的であり、クラスメイトとも非常に仲良くやっています。私は元々日本でも飲み会のようなイベントはあまり断らないタイプで、アメリカに来てからは更にクラスメイトと仲良くなりたい、砕けた英語を聞き取り、話せるようになりたいというモチベーションもあるので、日本人コミュニティには依存しすぎないように気をつけ、クラスメイトからの誘いはなるべく断らないようにしています。それを 3 ヶ月続けてみた結果、「Shunya は Asian で英語も下手[4]なのに社交的で偉い」という謎の好評価（?）を得て打ち解けることができました。

[4] クラスメイト 20 名中、英米からの学位を取得していない学生は私を含めて 4 人しかおらず、私の次に「英語ができない」学生（韓国系アルゼンチン人）は TOEFL で 113 点を取っています。

英語が苦手な（特にアジア人の）学生たちは身内のコミュニティに閉じこもることが多いといわれていますが、率直に言ってこれは無理なからぬことのように思います。「大人数で砕けた会話をしている状況」は、1 対 1 の対話と比較してはるかに難易度が高いです。特にお酒が入る場では、周りは騒がしく、周りの学生は早口で砕けた英語を話すようになり、自分の耳は上手く働かなくなるという三重苦で、必死に酔った頭を回転させ、断片的に聞き取れた内容を補完するような状態になります。こういう場でしか聞けない情報が聞け、とれないコミュニケーションがとれるという意味では楽しく、面白いのですが、英語に十分慣れていない学生にとっては、研究外の話題についての歓談はオフの時間の気晴らしとは対極に位置します。

夏の学期が始まる前の頃は授業（学期開始前に行われる、数学の補講）を終えた後、クラスメイト達は昼食をとりながら一休み。夜はまだ学期も始まっていないし、パロアルトの pub でも回って交流を深めよう！ という感じのところが、私だけは授業後にネイティブたちによる手加減一切なしの英会話のレッスン、夜は更に難易度の高いスーパーエクストリームなレッスンという超過酷なメニューとなり、補講の時間がむしろ休憩時間のように感じられていました。今では当時と比べるとだいぶましになり、会話の細部がわからないことは多々ありつつも、休憩時間がちゃんと休憩として機能するようになってきました。

学部・修士とイギリスで過ごしたドイツ人の友人は、「1 年もあれば不自由しなくなるから心配するな」と言ってくれていますが、とにかく語学については苦手意識がとても強いので、自信はありません。ともかく砕けた会話も、Academic Discussion も、精一杯努力し、次回の留学生レポートで「スラングまで使いこなせるようになった」と報告したいところです。

4. おわりに

渡米してから 3 ヶ月、本当に未知の体験が多い毎日で、ご報告したいことはまだまだたくさんあるのですが、気がつけば既に分量が 5 ページにもなってしまったので、ひとまず以上を第 1 回の留学生レポートとしたいと思います。最後に、改めて私の学生生活をご支援してくださっている、船井情報科学振興財団の皆様に、心より感謝の意を表します。頂いているご支援の重みを忘れることなく、学業に励みます。